

毛利先生

芥川龍之介

青空文庫

歳^{さい}晩^{ばん}のある暮方、自分は友人の批評家と二人で、所謂^{いわゆる}腰^{こし}弁^ん街^{かい}道^{どう}の、裸になった並樹の柳の下を、神田橋^{かんだばし}の方へ歩いていた。自分たちの左右には、昔、島崎^{しまざき}藤村^{とうそん}が「もつと頭^{かしら}をあげて歩け」と慷慨^{こうがい}した、下級官吏らしい人々が、まだ漂^{ただよ}っている黄^{たそ}昏^{がれ}の光の中に、蹠^{そろう}跟^{ろう}たる歩みを運んで行く。期せずして、同じく憂鬱な心もちを、払いのけようとしても払いのけられなかったからであろう。自分たちは外^{がい}套^{とう}の肩をすり合せるようにして、心もち足を早めながら、大手町^{おおもてまち}の停留場^{ていりゆうば}を通りこすまでは、ほとんど一言^{ひとこと}もきかずにいた。すると友人の批評家が、あすこの赤い柱の下に、電車を待っている人々の寒むような姿を

一瞥すると、急に身ぶるいを一つして、

「毛利先生もうりの事を思い出す。」と、独り語ごとのように呟つぶやいた。

「毛利先生と云うのは誰だい。」

「僕の中学の先生さ。まだ君には話した事がなかったかな。」

自分は否いなと云う代りに、黙って帽子の庇ひさしを下げた。これから下

に掲げるのはその時その友人が、歩きながら自分に話してくれた、その毛利先生の追憶ついおくである。――

もうかれこれ十年ばかり以前、自分がまだある府立中学の三年級にいた時の事である。自分の級に英語を教えていた、安達先生あだちと云う若い教師が、インフルエンザから来た急性肺はいえん炎で冬期休業の間に物故ぶつこしてしまった。それが余り突然だったので、適当な後任を物色する余裕がなかったからの窮きゆう策さくであろう。自分の中学は、当時ある私立中学で英語の教師を勤めていた、毛利先生もうりと云う老人に、今まで安達先生の受持っていた授業を一時囑託した。

自分が始めて毛利先生を見たのは、その就任当日の午後である。自分たち三年級の生徒たちは、新しい教師を迎えると云う好奇心に圧迫されて、廊下ろうかに先生の靴音が響いた時から、いつになくひ

つそりと授業の始まるのを待ちうけていた。所がその靴音が、日かげの絶えた、寒い教室の外に止まって、やがて扉が開かれると、——ああ、自分はこう云う中にも、歴々とその時の光景が眼に浮んでいゝ。扉を開いてはいつて来た毛利先生は、何より先その背の低いのがよく縁日の見世物に出る蜘蛛男と云うものを聯想させた。が、その感じから暗澹たる色彩を奪つたのは、ほとんど美しいとでも形容したい、光滑々たる先生の禿げ頭で、これまた後頭部のあたりに、種々たる胡麻塩の髪の毛が、わずかに残喘を保っていたが、大部分は博物館の教科書に画が出ている駝鳥の卵なるものと相違はない。最後に先生の風采を凡人以上に超越させたものは、その怪しげなモオニング・コオトで、これは

過去において黒かったと云う事実を危く忘却させるくらい、文字通り蒼然たる古色を帯びたものであつた。しかも先生のうすよごれた折襟には、極めて派手な紫の襟ネクタイ飾が、まるで翼をひろげた蛾がのように、ものものしく結ばれていたと云う、驚くべき記憶さえ残っている。だから先生が教室へはいると同時に、期せずして笑を堪こらえる声が、そここの隅から起つたのは、元もとより不思議でも何でも無い。

が、読とくほん本と出席簿とを抱えた毛利先生は、あたかも眼中に生徒のないような、悠然とした態度を示しながら、一段高い教壇に登つて、自分たちの敬礼に答えると、いかにも人の好きそうな、血色の悪い丸顔に愛あいきよう嬌のある微笑を漂わせて、

「諸君」と、かなきりごえ金切声で呼びかけた。

自分たちは過去三年間、いまだかつ未嘗てこの中学の先生から諸君を以て遇せられた事は、一度もない。そこで毛利先生のこの「諸君」は、勢い自分たち一同に、思わず驚嘆の眼を見開かせた。と同時に自分たちは、すでに「諸君」と口を切った以上、その後はさしずめ授業方針か何かの大演説があるだろうと、息をひそめて待ちかまえていたのである。

しかし毛利先生は、「諸君」と云ったまま、教室の中を見廻して、しばらくは何とも口を開かない。肉のたるんだ先生の顔には、悠然たる微笑の影が浮んでいるのにかかわ関らず、こうかく口角の筋肉は神経的にびくびく動いている。と思うと、どこか家畜のような所のあ

是れはばれ
 る晴々した眼の中にも、絶えず落ち着かない光が去来した。
 それがどうも口にこそ出さないが、何か自分たち一同に哀願した
 いものを抱いていて、しかもその何ものかと云う事が、先生自身
 にも遺憾ながら判然と見きわめがつかないらしい。

「諸君」

やがて毛利先生は、こう同じ調子で繰返した。それから今度は
 その後へ、丁度その諸君と云う声の反響を捕えようとする如く、
 「これから私が、諸君にチョイス・リイダアを教える事になりま
 した」と、いかにも慌しくつけ加えた。自分たちはますます好奇
 心の緊張を感じて、ひっそりと鳴りを静めながら、熱心に先生の
 顔を見守っていた。が、毛利先生はそう云うと同時に、また哀願

するような眼つきをして、ぐるりと教室の中を見廻すと、それぎりで急に椅子いすの上へ弾機バネがはずれたように腰を下した。そうして、すでに開かれていたチョイス・リイダアの傍かたわらへ、出席簿をひろげて眺め出した。この唐突たる挨拶の終り方が、いかに自分たちを失望させたか、と云うよりもむしろ、失望を通り越して、いかに自分たちを滑稽に感じさせたか、それは恐らく云う必要もない事であろう。

しかし幸いにして先生は、自分たちが笑を洩もらすのに先立って、あの家畜のような眼を出席簿から挙げたと思うと、たちまち自分たちの級の一人を「さん」づけにして指名した。勿論すぐに席を離れて、訳読して見ろと云う相図あいずである。そこでその生徒は立ち

上つて、ロビンソン・クルウソーか何かの一節を、東京の中学生に特有な、気の利いた調子で訳読した。それをまた毛利先生は、時々紫の襟ネクタイ飾へ手をやりながら、誤訳は元より些ささい細な発音の相違まで、一々丁寧に直して行く。発音は妙に気取った所があるが、大体正確で、明瞭で、先生自身もこの方面が特に内心得意らしい。が、その生徒が席に復して、先生がそこを訳読し始めると、再び自分たちの間には、そこから失笑の声が起こり始めた。と云うのは、あれほど発音の妙を極めた先生も、いざ翻訳をしてみると、ほとんど日本人とは思われないくらい、日本語の数を知っていない。あるいは知っていても、その場に臨んでは急には思い出せないであろう。たとえばたった一行を訳するにしても、

「そこでロビンソン・クルウソオは、とうとう飼う事にしました。

何を飼う事にしたかと云えば、それ、あの妙な獣けだもので——動物園に

沢山いる——何と云いましたかね、——ええとよく芝居をやる——

—ね、諸君も知っているでしょう。それ、顔の赤い——何、猿？

そうそう、その猿です。その猿を飼う事にしました。」

勿論猿でさえこのくらいだから、少し面倒な語ことばになると、何度

もその周囲を低徊した揚句でなければ、容易に然るべき訳語には

ぶつからない。しかも毛利先生はその度にひどく狼狽ろうばいして、ほ

とんどあの紫の襟ネクタイ飾を引きちぎりはしないかと思うほど、頻しきりに

喉のどもと元へ手をやりながら、当惑そうな顔をあげて、慌あわただしく自分た

ちの方へ眼を飛ばせる。と思うとまた、両手で禿はげ頭を抑えなが

ら、机の上へ顔を伏せて、いかにも面目なさそうに行きづまってしまう。そう云う時は、ただでさえ小さな先生の体が、まるで空気の抜けた護謨風船ごむふうせんのように、意気地なく縮み上ちぢつて、椅子いすから垂れている両足さえ、ぶらりと宙に浮びそうな心もちがした。それをまた生徒の方では、面白い事にして、くすくす笑う。そうして二三度先生が訳読を繰返あいだす間には、その笑い声も次第に大胆になつて、とうとうしまいには一番前の机からさえ、公然と湧き返るようになった。こう云う自分たちの笑い声がどれほど善良な毛利先生につらかったか、——現に自分ですら今日きょうその刻薄こくはくな響を想起すると、思わず耳を蔽おほいたくなる事は一いつさい再さいでない。

それでもなお毛利先生は、休憩時間の喇叭らっぱが鳴り渡るまで、勇

敢に訳読を続けて行つた。そうして、ようやく最後の一節を読み終ると、再び元のような悠然たる態度で、自分たちの敬礼に答えながら、今までの惨澹^{さんたん}たる悪闘も全然忘れてしまったように、落ち着き払って出て行つてしまつた。その後^{あと}を追いかけてどつと自分たちの間から上つた、嵐のような笑い声、わざと騒々しく机の蓋^{ふた}を明けたり閉めたりさせる音、それから教壇へとび上つて、毛利先生の身ぶりや声^{こわいろ}色^{いろ}を早速使つて見せる生徒——ああ、自分はまだその上に組長の章^{しるし}をつけた自分までが、五六人の生徒にとり囲まれて、先生の誤訳^{とくとく}を得々と指摘していたと云う事実すら、思い出さなければならぬのであろうか。そうしてその誤訳は？ 自分は実際その時でさえ、果してそれがほんとうの誤訳か

どうか、確かな事は何一つわからずに威張いばっていたのである。

それから三四日経へたある午ひるの休憩時間である。自分たち五六人は、機械体操場の砂だまりに集まって、ヘルの制服の背を暖い冬ひなたの日向ひなたに曝さらしながら、遠からず来きたるべき学年試験うわさの噂うわさなどを、口まめにしゃべり交かしていた。すると今まで生徒と一しよに鉄棒へぶら下ぶらっていた、体量十八貫と云う丹波たんば先生が、「一二、」と大きな声をかけながら、砂の上へ飛び下くだりると、チョツキばかりに

運動帽をかぶった姿を、自分たちの中に現して、

「どうだね、今度来た毛利先生は。」と云う。丹波先生はやはり

自分たちの級に英語を教えていたが、有名な運動好きで、兼ねて

詩吟しぎんが上手だと云う所から、英語そのものは嫌っていた柔剣道の

選手などと云う豪傑連の間にも、大分評判がよかつたらしい。そ

こで先生がこう云うと、その豪傑連の一人がミットを弄もてあそびながら、

「ええ、あんまり——何です。みんな皆あんまり、よく出来ないようだ

つて云っています。」と、柄がらにもなくてはにかんだ返事をした。す

ると丹波先生はズボンの砂を手巾ハンケチではたきながら、得意そうに

笑つて見せて、

「お前よりも出来ないか。」

「そりや僕より出来ます。」

「じゃ、文句を云う事はないじゃないか。」

豪傑はミットをはめた手で頭を掻きながら、意気地なくひっこ
んでしまった。が、今度は自分の級の英語の秀才が、度の強い近
眼鏡をかけ直すと、年に似合わずませた調子で、

「でも先生、僕たちは大抵たいてい専門学校の入学試験を受ける心算な
んですから、出来る上にも出来る先生に教えて頂きたいと思つて
いるんです。」と、抗弁した。が、丹波先生は不相変あいかわらず勇壯に笑
いながら、

「何、たった一学期やそこいら、誰に教わったって同じ事さ。」

「じゃ毛利先生は一学期だけしか御教えにならないんですか。」

この質問には丹波先生も、いささか急所をつかれた感があったらしい。世故せこに長けた先生はそれにはわざと答えずに、運動帽を脱ぬぎながら、五分刈ごぶがりの頭の埃ほこりを勢よく払い落すと、急に自分たち一同を見渡して、

「そりや毛利先生は、随分古い人だから、我々とは少し違っているさ。今朝も僕が電車へ乗ったら、先生は一番まん中にかけていたつけが、乗換えの近所になると、『車掌、車掌』って声をかけるんだ。僕は可笑おかしくって、弱ったがね。とにかく一風いっふう変わった人には違いないさ。」と、巧たくみに話頭を一転させてしまった。が、毛利先生のそう云う方面おどろに関してなら、何も丹波先生を待たなくとも、自分たちの眼を駭おどろかせた事は、あり余るほど沢山ある。

「それから毛利先生は、雨が降ると、洋服へ下駄げたをはいて来られるそうです。」

「あのいつも腰に下っている、白い手巾ハンカチへ包んだものは、毛利先生の御弁当じゃないんですか。」

「毛利先生が電車の吊皮つりかわにつかまっていたら、糸の手袋が穴だらけだったって云う話です。」

自分たちは丹波先生を囲んで、こんな愚にもつかない事を、四方からやかましく饒舌しゃべり立てた。ところがそれに釣りこまれたのか、自分たちの声が一しきり高くなると、丹波先生もいつか浮き、浮きした声を出して、運動帽を指の先でまわしながら、

「それよりかき、あの帽子が古物こぶつだぜ——」と、思わず口へ出し

て云いかけた、丁度その時である。機械体操場と向い合つて、わずかに十歩ばかり隔つてゐる二階建の校舎の入口へ、どう思つたかもうり毛利先生が、その古物の山高帽やまたかぼうを頂いて、例の紫の襟飾ネクタイへ仔細しさいらしく手をやったまま、悠然として小さな体を現した。入口の前には一年生であろう、子供のような生徒が六七人、人馬ひとうまか何かして遊んでいたが、先生の姿を見ると、これは皆先を争つて、丁寧に敬礼する。毛利先生もまた、入口の石段の上にさした日の光の中に佇たたずんで、山高帽をあげながら笑つて礼を返してゐるらしい。この景色を見た自分たちは、さすがに皆一種の羞恥しゆううちを感じて、しばらくの間はひっそりと、賑にぎやかな笑い声を絶つてしまった。が、その中で丹波先生だけは、ただ、口を噤つぶむべく余りに恐縮と

狼狽ろうばいとを重ねたからでもあつたらう。「あの帽子が古物だぜ」と、云いかけた舌をちよいと出して、素早く運動帽をかぶつたと思つと、突然くるりと向きを変えて、「一——」と大きく喚わめきながら、チョツキ一つの肥つた体を、やにわに鉄棒へ抛りつけた。そうして「海老上えびあがり」の両足を遠く空ざまに伸しながら、「二——」と再び喚いた時には、もう冬の青空を鮮あざやかに切りぬいて、楽々とその上あがに上つていた。この丹波先生の滑稽なてれ隠しが、自分たち一同を失笑させたのは無理もない。一瞬間声を呑んだ機械体操場の生徒たちは、鉄棒の上の丹波先生を仰ぎながら、まるで野球の応援でもする時のように、わつと嘸はやし立てながら、拍手をし

こう云う自分も皆と一しよに、喝采かつさいをしたのは勿論である。

が、喝采している内に、自分は鉄棒の上の丹波先生を、半ば本能的に憎み出した。と云つてもそれだけまた、毛利先生に同情を注いだと云う訳でもない。その証拠にはその時自分が、丹波先生へ浴びせた拍手は、同時に毛利先生へ、自分たちの悪意を示そうと云う、間接目的を含んでいたからである。今自分の頭で解剖すれば、その時の自分の心もちは、道德の上で丹波先生を侮蔑ぶべつすると共に、学力の上では毛利先生も併せて侮蔑していたとでも説明する事が出来るかも知れない。あるいはその毛利先生に対する侮蔑は、丹波先生の「あの帽子が古物こぶつだぜ」によつて、一層然るべき裏書きほどこを施されたような、ずうずうしさを加えていたとも考える

事が出来るであろう。だから自分は喝采しながら、そびや聳かした肩越しに、昂然として校舎の入口を眺めやった。するとそこには依然として、わが我毛利先生が、まるで日の光を貪むさぼっている冬蠅ふゆばいか何かのように、じつと石段の上に佇たたずみながら、一年生の無邪気な遊戯を、余念もなく独り見守っている。その山高帽子とその紫の襟ネクタ飾イと——自分は当時、むしろ、晒わらうべき対象として、一瞥の中うちに収めたこの光景が、なぜか今になって見ると、どうしてもまた忘れる事が出来ない。……

就任の当日毛利先生が、その服装と学力とによつて、自分たちに起させた侮蔑ぶべつの情は、丹波先生たんばのあの失策（？）があつて以来、いよいよ級全体に盛んさかになつた。すると、また、それから一週間とたたないある朝の事である。その日は前夜から雪が降りつづけ、窓の外にさし出ている雨天体操場の屋根などは、一面にもう瓦の色が見えなくなつてしまつたが、それでも教室の中にはストオヴが、赤々あかあかと石炭の火を燃え立たせて、窓硝子ガラスにつもる雪さえ、うす青い反射の光を漂わす暇ひまもなく、溶とけて行つた。そのストオヴの前に椅子を据えながら、毛利先生は例の通り、金切声かなきりごえをふりしぼつて、熱心にチヨイス・リイダアの中にあるサアム・

オヴ・ライフを教えていたが、勿論誰も真面目まじめになつて、耳を傾けている生徒はない。ない所か、自分の隣にいる、ある柔道の選手とくほんの如きは、読本とくほんの下へ武俠世界ぶきょうせかいをひろげて、さつきから押おしかわしゆんろう

川春浪の冒険小説を読んでいる。

それがかれこれ二三分も続いたのであろう。その中に毛利先生は、急に椅子いすから身を起すと、丁度今教えているロングフェロオの詩にちなんで、人生と云う問題を弁じ出した。趣旨はどんな事だったか、さらに記憶に残っていないが、恐らくは議論と云うよりも、先生の生活を中心とした感想めいたものだったと思う。と云うのは先生が、まるで羽根を抜かれた鳥のように、絶えず両手を上げ下げしながら、慌あわただしい調子で饒舌しゃべった中に、

「諸君にはまだ人生はわからない。ね。わかりたいって、わかりはしません。それだけ諸君は幸福なんでしょう。我々になると、ちゃんと人生がわかる。わかるが苦しい事が多いです。ね。苦しい事が多い。これで私わたくしにしても、子供が二人ある。そら、そこで学校へ上げなければならぬ。上げれば——ええと——上げれば——学資？ そうだ。その学資がい入るでしょう。ね。だから中々苦しい事が多い……」と云うような文句のあつた事を、かすかに覚えてゐるからである。が、何も知らない中学生に向つてさへ、生活難を訴うえる——あるいは訴つえない心算でも訴うえている、先生の心もちなぞと云うものは、元より自分たちに理解されよう筈がない。それより訴うえると云うその事実の、滑こ稽けいな側面ばか

り見た自分たちは、こう先生が述べ立てている中に、誰からともなくくすくす笑い出した。ただ、それがいつもの哄然たる笑声に変わらなかったのは、先生の見すばらしい服装と金切かなきりごえ声をあげて饒舌しゃべっている顔つきとが、いかにも生活難それ自身の如く思われ、幾分の同情を起させたからであろう。しかし自分たちの笑い声が、それ以上大きくならなかつた代りに、しばらくすると、自分の隣にいた柔道の選手が、突然武侠世界をさし置いて、虎のよういきおいな勢を示しながら、立ち上った。そうして何を云うかと思うと、「先生、僕たちは英語を教えて頂くために、出席しています。ですからそれが教えて頂けなければ、教室へはいつている必要はありません。もしもつと御話が続けるのなら、僕は今から体操場へ行

きます。」

こう云つて、その生徒は、一生懸命に苦い顔をしながら、恐しい勢でまた席に復した。自分はその時の毛利先生もうりくらい、不思議な顔をした人を見た事はない。先生はまるで雷らいに撃たれたように、口を半ば開けたまま、ストオヴの側へ棒立ちになつて、一二分の間あいだはただ、その慄ひょう悍かんな生徒の顔ばかり眺めていた。が、やがて家畜かちくのような眼の中に、あの何かを哀願するような表情が、際きわどくちくりと閃ひらめいたと思うと、急に例の紫の襟ネクタイ飾へ手をやって、二三度秃はげ頭を下さげながら、

「いや、これは私わたしが悪い。私が悪かつたから、重々あやまります。成程諸君は英語を習うために出席している。その諸君に英語を教

えないのは、私が悪かった。悪かったから、重々あやまります。ね。重々あやまります。」と、泣いてでもいるような微笑を浮かべて、何度となく同じような事を繰り返した。それがストオヴの口からさす赤い火の光を斜ななめに浴びて、上衣うわぎの肩や腰の摺すり切れた所が、一層鮮に浮んで見える。と思うと先生の禿かぶげ頭も、下げる度に見事な赤銅色しゃくどういろの光沢を帯びて、いよいよ駝だちよう鳥の卵らしい。が、この気の毒な光景も、当時の自分には徒いたずらに、先生の下等な教師根性を暴露したものとしか思われなかった。毛利先生は生徒の機嫌きげんをとつてまでも、失職の危険を避けようとしている。だから先生が教師をしているのは、生活のために余儀なくされたので、何も教育そのものに興味があるからではない。——臃おぼろげながらこ

んな批評を逞たくましゆうした自分は、今は服装と学力とに対する侮蔑ばかりでなく、人格に対する侮蔑さえ感じながら、チヨイス・リイダアの上へ頬杖ほおづえをついて、燃えさかるストオヴの前へ立つたまま、精神的にも肉体的にも、火炙りひあぶにされている先生へ、何度も生意気なまいきな笑い声を浴びせかけた。勿論これは、自分一人に限った事でも何でもない。現に先生をやりこめた柔道の選手などは、先生が色を失って謝罪すると、ちよいと自分の方を見かえつて、狡こ猾うかつそうな微笑を洩もらしながら、すぐまた読本の下にある押川おしかわしゅ春浪んろうの冒険小説を、勉強し始めたものである。

それから休憩時間の喇叭らっぱが鳴るまで、我わが毛利先生はいつもよりさらにしどろもどろになって、憐あわれむべきロングフェロオを無二無むにむ

三さんに訳読しようとした。「Life is real, life is earnest.」——あの血色の悪い丸顔を汗ばませて、絶えず知られざる何物かを哀願しながら、こう先生の読み上げた、喉のどのつまりそうな金切声かなきりごえは、今日こんにちでもなお自分の耳の底に残っている。が、その金切声の中に潜んでいる幾百万の悲惨な人間の声は、当時の自分たちの鼓膜こまくを刺戟しげきすべく、余りに深刻なものであった。だからその時間中、倦怠けんたいに倦怠を重ねた自分たちの中には、無遠慮な欠伸あくびの声を洩らしたもののさえ、自分のほかにも少くはない。しかし毛利先生は、ストオヴの前へ小さな体を直立させて、窓硝子をかすめて飛ぶ雪にも全然頓着せず、頭の中の鉄条ゼンマイが一時にほぐれたような勢いきおいで、絶えず読本をふりまわしながら、必死になって叫びつづける。

「Life is real, life is earnest. —— Life is real, life is earnest.」……

こう云う次第だったから、一学期の雇庸期間こようがすぎて、再び毛も利先生うりの姿を見る事が出来なくなってしまう時も、自分たちは喜びこそすれ、決して惜しいなどとは思わなかった。いや、その喜ぶと云う気さえ出なかったほど、先生の去きよしゆう就しゆうには冷淡だったと云えるかも知れない。殊に自分などはそれから七八年、中学から高等学校、高等学校から大学と、次第に成人おとなになるのに従っ

て、そう云う先生の存在自身さえ、ほとんど忘れてしまいうくらい、全然何の愛惜も抱かなかつたものである。

すると大学を卒業した年の秋——と云つても、日が暮れると、しばしば深い靄もやが下りる、十二月の初旬近くで、並木の柳や鈴すずか懸けなどが、とうに黄いろい葉をふるっていた、ある雨あまあがりの夜の事である。自分は神田の古本屋ふるほんやを根気よくあさりまわつて、歐洲戦争が始まつてから、めつきり少くなつた独逸書ドイツを一二冊手に入れた揚句あげく、動くともなく動いている晩秋つめたの冷い空気を、外がいと套うの襟にぎやかに防ぎながら、ふと中西屋なかにしやの前を通りかかると、なぜか賑にぎやかな人声と、暖い飲料なげとが急に恋しくなつたので、そこにあつたカツプエの一つへ、何気なにげなく独りではいつて見た。

ところが、はいつて見るとカツフエの中は、狭いながららんと
として、客の影は一人もない。置き並べた大理石の卓テエブルの上には、
砂糖壺の鍍金めつきばかりが、冷く電燈の光を反射している。自分はま
るで誰かに欺あざむかれたような、寂しい心もちを味いながら、壁には
めこんだ鏡の前の、卓テエブルへ行つて腰を下した。そうして、用を聞き
に来た給仕に珈琲コオヒイを云いつけると、思い出したように葉巻を出
して、何本となくマチを摺すつた揚句あげく、やつとそれに火をつけた。
すると間もなく湯気の立つ珈琲茶碗が、自分の卓テエブルの上に現れたが、
それでも一度沈んだ気は、外に下りている靄もやのように、容易な事
では晴れそうもない。と云つて今古本屋から買つて来たのは、字
の細こまかい哲学の書物だから、ここでは折角の名論文も、一頁と読む

のは苦痛である。そこで自分は仕方がなく、椅子の背へ頭をもたせてブラジル珈琲とハヴァナと代る代る使いながら、すぐ鼻の先の鏡の中へ、漫然と煮え切らない視線をさまよわせた。

鏡の中には、二階へ上る櫓はしごだん子段の側面を始として、向うの壁、白塗りの扉ドア、壁にかけた音楽会の広告などが、舞台面の一部でも見るように、はつきりと寒く映うつっている。いや、まだそのほかにも、大理石の卓テエブルが見えた。大きな針葉樹の鉢も見えた。天井から下った電燈も見えた。大形な陶器の瓦斯ガスだんろ暖炉も見えた。その暖炉の前を囲んで、しきりに何か話している三四人の給仕の姿も見えた。そうして——こう自分が鏡の中の物象を順々に点検して、暖炉の前に集まっている給仕たちに及んだ時である。自分は彼等に

囲まれながら、その卓に向つて一人の客の姿に驚かされた。それが、今まで自分の注意に上らなかつたのは、恐らく周囲の給仕にまぎれて、無意識にカツフェの厨丁コックか何かと思ひこんでいたからであろう。が、その時、自分が驚いたのは、何もいないと思つた客が、いたと云うばかりではない。鏡の中に映つている客の姿が、こちらへは僅に横顔しか見せていないにも関らず、あの駝だ鳥ちようの卵のような、禿はげ頭の恰好と云い、あの古色蒼然としたオニング・コオトの容子ようすと云い、最後にあの永遠に紫な襟ネクタイ飾の色合いと云い、我毛利先生わがもつりだと云う事は、一目ですぐに知れたからである。

自分は先生を見ると同時に、先生と自分とを隔てていた七八年

の歳月を、咄嗟とつせに頭の中へ思い浮べた。チヨイス・リイダアを習っていた中学の組長と、今ここで葉巻の煙を静に鼻から出してゐる自分と——自分にとってその歳月は、決して短かかったとは思われない。が、すべてを押し流す「時」の流も、すでに時代を超越したこの毛利先生ばかりは、如何いかんともする事が出来なかつたからであらうか。現在この夜のカツフエで給仕と卓テエブルを分つている先生は、宛然えんぜんとして昔、あの西日にしびもささない教室で読本を教へていた先生である。禿げ頭も変らない。紫の襟ネクタイ飾も同じであつた。それからあの金切かなきりごえ声も——そういえば、先生は、今もあの金切声を張りあげて、忙せわしそうに何か給仕たちへ、説明しているようではないか。自分は思わず微笑を浮べながら、いつかひき立たな

い気分も忘れて、じつと先生の声に耳を借した。

「そら、ここにある形容詞がこの名詞を支配する。ね、ナポレオンと云うのは人の名前だから、そこでこれを名詞と云う。よろしいかね。それからその名詞を見ると、すぐ後に——このすぐ後にあるのは、何だか知っているかね。え。お前はどうか。」

「関係——関係名詞。」

給仕の一人が吃りながら、こう答えた。

「何、関係名詞？ 関係名詞と云うものはない。関係——ええと——関係代名詞？ そうそう関係代名詞だね。代名詞だから、それから、ナポレオンと云う名詞の代りになる。ね。代名詞とは名に代ることばる詞と書くだろう。」

話の具合では、毛利先生はこのカツフエの給仕たちに英語を教
えてでもいるらしい。そこで自分は椅子いすをずらせて、違った位置
からまた鏡を覗のぞきこんだ。すると果してその卓テエブルの上には、読本ら
しいものが一冊開いてある。毛利先生はその頁を、頻しきりに指でつき
立てながら、いつまでも説明に厭あきる容ようす子がない。この点もまた
先生は、依然として昔の通りであった。ただ、まわりに立ってい
る給仕たちは、あの時の生徒と反対に、皆熱心な眼を輝かせて、
目白押めじろおしに肩を合せながら、慌あわただしい先生の説明におとなしく耳を
傾けている。

自分は鏡の中のこの光景を、しばらく眺めている間に、毛利先
生に対する温情が意識の表面へ浮んで来た。一そ自分もあすこへ

行つて、先生と久闊きゆうかつを叙し合おうか。が、多分先生は、たった一学期の短い間、教室だけで顔を合せた自分などを覚えていない。よしまた覚えているとしても——自分は卒然そつぜんとして、当時自分たちが先生に浴びせかけた、悪意のある笑い声を思い出すと、結局名乗なのりなどはあげない方が、遙はるかに先生を尊敬する所以ゆえんだと思ひ直した。そこで珈琲コオヒイが尽きたのを機会しおにして、短くなつた葉巻を捨てながら、そつと卓テエブルから立上ると、それが静にした心算つもりでも、やはり先生の注意みだを擾みだしたのであろう。自分が椅子を離れると同時に、先生はあの血色の悪い丸顔を、あのうすよごれた折襟を、あの紫の襟ネクタイ飾タイを、一度にこちらへふり向けた。家畜かちくのような先生の眼と自分の眼とが、鏡の中で刹那せつなの間出あいだ会つたのは正にこの

時である。が、先生の眼の中には、さつき自分が予想した通り、果して故人に遇つたと云う気色けしきらしいものも浮んでいない。ただ、そこに閃いていたものは、例の如く何ものかを、常に哀願しているような、傷いたましい目まなざしだけであつた。

自分は眼を伏せたまま、給仕の手から伝票を受けとると、黙つてカツフエの入口にある帳場ちようばの前へ勘定に行つた。帳場には自分も顔馴染かおなじみの、髪を綺麗に分けた給仕頭きゆうじがしらが、退屈そうに控えている。

「あすこに英語を教えている人がいるだろう。あれはこのカツフエで頼んで教えて貰うのかね。」

自分は金を払いながら、こう尋ねると、給仕頭は戸口の往來を

眺めたまま、つまらなそうな顔をして、こんな答を聞かせてくれた。

「何、頼んだ訳わけじゃありません。ただ、毎晩やって来ちや、ああやって、教えているんです。何でももう老ろうきゆう朽の英語の先生だそうで、どこでも傭やとつてくれないんだって云いますから、大方暇つぶしに来るんでしょう。珈琲一杯で一晩中、坐りこまれるんですから、こつちじゃあんまり難ありがた有くもありません。」

これを聞くと共に自分の想像には、咄とつさ嗟に我毛利先生の知られざる何物かを哀願している、あの眼つきが浮んで来た。ああ、毛利先生。今こそ自分は先生を——先生の健けなげ気な人格を始めて髻ぼうふし得たような心もちがする。もし生れながらの教育家と云う

ものがあるとしたら、先生は実にそれであろう。先生にとって英語を教えると言う事は、空気を呼吸すると云う事と共に、寸刻といえども止める事は出来ない。もし強いて止めさせれば、丁度水分を失った植物か何かのように、先生の旺盛な活力も即座に萎び微してしまふのであろう。だから先生は夜毎に英語を教えると云うその興味に促されて、わざわざ独りこのカツフェへ一杯の珈琲を啜りに来る。勿論それはあの給仕頭などに、暇つぶしを以て目さるべき悠長な性質のものではない。まして昔、自分たちが、先生の誠意を疑つて、生活のためと嘲つたのも、今となつては心から赤面のほかはない誤謬であつた。思えばこの暇つぶしと云い生活のためと云う、世間の俗悪な解釈のために、我毛利先生は

どんなにか苦しんだ事であろう。元よりそう云う苦しみの中にも、先生は絶えず悠然たる態度を示しながら、あの紫の襟ネクタイ飾とあのやまたかぼう山高帽とに身を固めて、ドン・キホオテよりも勇ましく、不転の訳読を続けて行つた。しかし先生の眼の中には、それでもなお時として、先生の教授を受ける生徒たちの——恐らくは先生が面しているこの世間全体の——同情を哀願するひらめ閃きが、傷ましくも宿つていたではないか。

せつな あいだ刹那の間こんな事を考えた自分は、泣いて好いか笑つて好いか、わからないような感動に圧せられながら、外套の襟に顔を埋めて、そうそう々カツフエの外へ出た。が、あと後では毛利先生が、明るすぎて寒い電燈の光の下で、客がいないのを幸いに、さいわ不相変あいかわらず金切声かなきりごえ

をふり立て、熱心な給仕たちにまだ英語を教えている。

「名に代る詞ことばだから、代名詞と云う。ね。代名詞。よろしいかね

……」

（大正七年十二月）

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年10月28日第1刷発行

1996（平成8）年7月15日第11刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1998年12月7日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

毛利先生

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>